様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ２３０１８

研究課題名（和文）ジョルジュ・バタイユを起点としたフランス思想史の再構築

研究課題名（英文）Reconstruction of the History of French Thought starting from Georges Bataille

研究代表者
石川　学（ISHIKAWA, MANABU）

慶應義塾大学・商学部（日吉）・准教授

研究者番号：６０８４２９４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀フランスの作家ジョルジュ・バタイユの思想を参照軸として、アンドレ・ブルトン、ジャン＝ポール・サルトル、エマニュエル・レヴィナスという同世代以降の文学者や思想家たちの思想を検証し、もって、バタイユから現代に至る思想史の一系譜を浮かび上がらせようとしたものである。通常、影響関係が必ずしも重視されなかったり、敵対関係にあるとみなされたりしているこれらの人物たちの共通の主題をめぐる論考を相互比較し、また、共通の読書経験が持つ意味、共通の人間関係を通じた繋がりを検討することで、彼らの知的交流をより深い位相から理解するのに資する研究成果を達成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
バタイユ、ブルトン、サルトル、レヴィナスという、各々が現代においても世界規模で研究対象となっている知の巨人たちの思想的相互連関を従来と異なる視座から明らかにした本研究は、既存のフランス思想史を刷新する学術的意義を有している。今後、この成果の公表がさらに進むとともに、当該領域の新たな基礎研究としての位置づけを得ることが期待される。個々の作家の専門研究にも新規な論点を提供するものとなるはずである。

研究成果の概要（英文）：This study attempts to examine, using the ideas of the 20th century French writer Georges Bataille as a reference axis, the ideas of A. Breton, J-P. Sartre, and E. Levinas, literary figures and thinkers of the same generation and later, and thereby highlight a genealogy in the history of thought from Bataille to the present day. By intercomparing the essays on common subjects of these figures, whose influence relationships are usually not always emphasized or considered adversarial, and by examining the significance of their reading experiences of the same books and the connections they made through their common relationships, we have achieved research results that contribute to deepen the understanding of their intellectual interactions.

研究分野：思想史

キーワード：フランス思想史　フランス文学　20世紀　文学論　ジョルジュ・バタイユ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究に着手するのに先立ち、研究代表者は、バタイユにおける「行動」（政治行動）の主題と「文学」の主題の連関を、この作家の全生涯の思索を対象として検討してきた。その過程で、第二次世界大戦を境にバタイユの関心の主眼が「行動」から「文学」へと移ること、その背景には、「行動」が否応なく併せ持つ、世界戦争に帰結するような「力への意志」への危惧があることを明らかにした。こうした思索の文脈において、ブルトンならびにシュルレアリスムへ評価の好転が起こることに着目し、その所以を掘り下げて検討する必要性を感じていた。

バタイユとサルトルの関係に関しては、痛烈なバタイユ批判として一般に了解されているサルトルの「新しい神秘家」（1943 年）を読解するなかで、バタイユがサルトルの批判を受けて、喪失や不在を実体的価値に転換する自らの思想傾向を自覚し、意識的に自身の論法に取り入れたのではないかという仮説を持つに至り、その検証を企図していた。

バタイユとレヴィナスの関係については、バタイユ自身が論考「実存主義から経済学の優位へ」（1947-48 年）において、「レヴィナスの思想は［…］ブランショのそれとも私のそれとも異なるものではない」という重大な表明を行っているにもかかわらず、先行研究でほとんど検討対象となっておらず、研究上の瑕疵を懸念していた。

２．研究の目的

本研究の目的は、これまでバタイユと文学史的・思想史的に区別されてきた、ブルトン、サルトル、レヴィナスとバタイユとの思想的結節点を探究することにより、シュルレアリスム／反シュルレアリスム、実存主義／反実存主義、共産主義／反共産主義、哲学／反哲学、理性／反理性などといった二項対立を多かれ少なかれ承認することで成り立つ既存の 20 世紀フランス思想史を刷新し、同時代を生きた彼らの、党派性や学問的基盤の違いに回収されない思想的交通のダイナミズムを浮かび上がらせることにある。

３．研究の方法

(1) バタイユとブルトンの連繋の解明

バタイユの第二次大戦後のシュルレアリスム論を読解し、シュルレアリスムならびにブルトンへの評価の所以を明らかにする。また、大戦前のブルトン批判を、戦後の評価に帰結する内容を備えるはずのものとして解析する。バタイユ思想におけるブルトン理解をこうして総合的に析出したのち、戦前のブルトンによるバタイユ批判に目を向け、その本質を抽出する。さらに戦後、バタイユとの和解の意思を示した時期のテクストを読解し、思想の変遷と持続とを明らかにする。「無意識」「行動」「神話」「文学」といった両者に共通のテーマを参照項目とし、思想的近親としての両者のありようを浮かび上がらせる。

(2) バタイユとサルトルの連繋の解明

サルトルのバタイユ批判を、批判対象であるバタイユのテクストや発言と照らし合わせ、その特質を理解する。続けて、バタイユによる反論を読解し、まずはこの両者の相違点を明確にする。サルトルによる批判の論点である「無の実体化」という傾向を、バタイユが自らの思想本質として敢えて肯定していくのではないかという仮説を掲げ、これついての検証を進展させる。こうしたバタイユにとってのサルトルの逆説的な近接性を踏まえたうえで、両者のボードレール論とジュネ論を比較対照し、「文学」への希望を媒介にした二者の思想の結節を解明する。

(3) バタイユとレヴィナスの連繋の解明

第二次大戦後の「実存主義者」レヴィナスを論じたバタイユの論考を読解し、レヴィナスへの評価と批判の特質を抽出する。同論考はサルトル論を含むため、この作業は (2) と兼ねて行う。バタイユ・レヴィナス双方の思想的盟友である、モーリス・ブランショからの影響を各々の場合で検証する。青年期にプルーストの読書に没頭した経験を共有している事実に鑑み、両者のプルースト論を比較対照する。近刊の、エロスと文学をめぐるレヴィナスのメモ書きも参照する。最終的に、文学に見出す可能性を通じた両者の思想的近接を明らかにし、(1)、(2) の成果と連結させて、「文学」の主題のもとで繋がる一連の思想史的系譜を開示する。

４．研究成果

(1) バタイユとブルトンの連繋の解明

まずは、第二次世界大戦以前のバタイユによるブルトン批判を辿り直すところから出発した。

シュルレアリスムの指導者ブルトンとバタイユの、戦前における文学者としての影響力は前者が圧倒的に優位であり、否応なくバタイユもその影響下で「無意識」「行動」「神話」「文学」といった共通の主題に思考を巡らすことになる。ブルトンを観念主義と論難し、自らを「物質主義」の立場に位置づけるバタイユは、無意識のうちに美なるものではなくおぞましいものを看取しつつその敢然たる肯定を主張し、サド文学をただ愛好する姿勢を廃して文学から実践への移行を訴え、美的感覚の変容を通じた世界変革ではなく物理力の行使を通じた既成秩序の転覆を呼びかけるなど、上記の主題に関して一貫してブルトンと対蹠的な思索と振る舞いを展開し、ブルトンからの指弾を受ける。その委細を経時的に追うなかで判明したのは、戦後バタイユのブルトン評価の好転が、戦時中（ドイツ占領下）のテキスト（『無神学大全』三部作）にすでに兆していることであった。それは、ブルトン評価の変遷として単独で生じたのではなく、戦争を前にした行動の無力の顕現と共同体の試みの失敗（具体的には、「社会学研究会」と結社「アセファル」の解散）、占領下での文筆活動への沈滞といった出来事が、書くことと読むことを通じた連帯の可能性への着目と、そうした連帯に基づく現実のかたちを取らない世界変革への希望をバタイユに生じさせ、結果、これまでのブルトンの思索と活動に正面から向き合うように導いたのである。同じ時期にブルトンがアメリカへの亡命を余儀なくされ、無力さをいわば共有することを経て、両者の思想的距離だけでなく、心理的距離が縮まったことも軽視するべきではない。以上を踏まえ、戦後バタイユの「シュルレアリスム、ならびにその実存主義との相違」（1946 年）を嚆矢とする、一連のシュルレアリスム論を検討すると、行動に傾斜したものとしての実存主義との対比において、「宗教」に傾斜したものとしての詩＝シュルレアリスムが、現実世界の変革に効力を及ぼそうとする企図の失敗において、その企図の持つ意義の真正さを読者に伝達する類い稀な営為として評価される、という図式が浮かび上がった。ブルトンの失敗は彼個人の過失ではなく、詩が必然的に抱え持つ、宗教たることの不能を担いきった結果なのであり、むしろその失敗を通じて、詩が宗教として機能する可能性を、不可能なものとして垣間見せるというのである。ヘーゲルの絶対知に非＝知への移行の手立てを見、「神話の不在」に「神話の不在の神話」の可能性を見る戦後バタイユの思索の根本に通じる理路が、ブルトンとシュルレアリスムへの評価に存しており、こうした観点が、ブルトン側の、「私の人生において知るのに値した無二の人たちの一人」というバタイユに対する新たな評価と交錯的に生じたものであることを、本研究は明らかにした。

（2）バタイユとサルトルの連繋の解明

バタイユとサルトルの関係が問題になるのは、『内的経験』（1943 年）の刊行と、サルトルによる批判論文「新しい神秘家」の発表以降である。サルトルは、エロス的経験等での脱自を「非＝知」（主体性を喪失する主体）が出現する契機だとするバタイユの見解について、「無の実体化」の詐術だと批判する。爾後、バタイユはこの批判にたびたび反論するが、それとまったく同時に、主体性の喪失を「普遍」の現れだとする議論や、「神話の不在」を「唯一真なる神話」だとする議論を積極的に展開する。このことへの着目から出発して、本研究は、バタイユがサルトルの批判を受けて、喪失や不在を実体的価値に転換する自らの思想傾向を自覚し、意識的に自身の論法に取り入れたのではないか、という仮説を立て、その検証を試みた。「新しい神秘家」におけるサルトルの筆致を精査すると明らかになるのは、その理路の精緻さであり、したがってバタイユの反論も、理に基づき誤解を指摘するという仕方ではなく、それぞれの議論における力点の差異を強調するという仕方で行われる。別様に言えば、バタイユはサルトルの正確な読みを参照し、それを自身の力点を強調するのに活かすかたちで取り上げるのである。対サルトル的な意図を含み持つ論考「実存主義から経済学の優位へ」での、主体性の喪失と普遍の現れとを結びつける立論はその顕著な事例であり、また、「神話の不在の神話」の観点は、かつてサルトルから発せられた「神話の神話」という揶揄に対し、「無の実体化」を敢えて引き受けながらなされた応答としても理解することができる。このような視座のもと、続けて、サルトルによるシュルレアリスム批判、また、サルトルのボードレール論とジュネ論を俎上に載せ、それぞれに対するバタイユの反応を検討することとした。第一の反応については、先行研究も指摘するように、サルトルによる行動の主張にバタイユは詩の擁護を対置するという根本的な骨格がある。第二・第三の反応においてもこの骨格は維持されるが、そこで浮かび上がるのは、成年と未成年、生産と消費、自由と悪といった、サルトルの議論に見出される二項対立において、上位である前者と下位である後者の相互前提的な性格を強調しながらそれらのヒエラルキーを動揺させ、作家の失敗としてサルトルに論じられる要素を失敗の真正な担い取りの証左として肯定しようとするバタイユの目論見である。このように、「無の実体化」の引き受けに端を発した不在の存在への転換、非価値の価値への転換が、バタイユの対サルトル的な論述で一貫して、かつ多様な仕方で展開されていることを本研究は明らかにした。

（3）バタイユとレヴィナスの連繋の解明

バタイユのレヴィナスに対する言及は、戦前の「ヒトラー主義哲学に関する若干の考察」（1937 年）が初めてだが、本格的な論考としては戦後の「実存主義から経済学の優位へ」を俟たなけれ

ばならず、またこれが唯一のものである。上述の通り対サルトル的な企図を持つこの論考でバタイユは、レヴィナスの『実存から実存者へ』（1947 年）を論じており、その論述に多くの紙幅が割かれている。レヴィナスは、モーリス・ブランショの小説『謎の男トマ』の一節を取り上げ、それを自身の提起する「ある（il y a）」を描写するものとしているのだが、この同じ数ページをバタイユは『内的経験』ですでに引用し、そこに「あるもの（ce qui est）」の描写を見出していた。もってバタイユは、「レヴィナスの思想は、［…］ブランショのそれとも私のそれとも異なるものではない」という判断を下すのだが、同時に、ブランショの「文学的テクスト」と対照的なレヴィナスの哲学的言述が「形式的な一般化」と不可分なゆえに、描写の対象である「純粋な実存の叫び」を事物へと変容して語るほかないことが批判されるのである。この論考以降、バタイユがレヴィナスを論じることはなく、レヴィナスの側からの応答もなされない。ブランショを介して顕在化した二人の思想家の連繋は、こうして途絶えたかに見えるのだが、本研究は、この二者が青年期にマルセル・プルーストの小説『失われた時を求めて』の熱狂的な読書経験を持つという共通性に着目し、それぞれのプルースト論を比較対照することを試みた。判明したのは、バタイユとともにレヴィナスが、「言葉にし得ない経験の伝達という問い」（バタイユ）を検討し、そうした伝達の可能性をプルーストの作品に、正確にはより広く、「詩」と文学に見て取ろうとしていることであり、それも、直接的な伝達ではなく、むしろ、伝達の不可能性を伝達する可能性に積極的な意義を見ている事実である。近刊のレヴィナスのエロス論を合わせて参照すると、「愛撫」などといった言語化不可能な経験を認識の対象として語る「日常の言語」「所有者の言語」がそうした経験を「覆い隠す」こと、「愛撫」が所有を求めない、「逃げ去るものとの戯れ」であるのに対し、「日常の言語」がそれを、認識を通じて所有されたものとして語ることが論じられている。バタイユにとってと同様に、レヴィナスにとっても、そうした経験の真正な描述は、詩と文学に委ねられるというのが本研究が提示する観点である。ただし、詩と文学の実践は、レヴィナス自身によっては担われなかった。哲学的言述に基づく哲学（存在論）の乗り越えという、バタイユが真剣に企てつつ限界を見出した目論見を、レヴィナスは自らの営為として選び取ったいうのが、本研究のたどり着いた展望である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 石川学	４．巻 20
２．論文標題 意識化のプロセスをめぐって　ジョルジュ・バタイユにおける「異質学」と「聖社会学」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Ｉ．Ｒ．Ｓ．ジャック・ラカン研究	６．最初と最後の頁 70-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川学	４．巻 -
２．論文標題 生命から学ぶ社会の成長と消費　バタイユ「全般経済」再考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 生命の経済	６．最初と最後の頁 225-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 石川学	４．巻 1
２．論文標題 バタイユとレヴィナス　交差、懸隔、そして	５．発行年 2019年
３．雑誌名 レヴィナス研究	６．最初と最後の頁 24-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 石川学
２．発表標題 意識化のプロセスをめぐって　ジョルジュ・バタイユにおける「異質学」と「聖社会学」
３．学会等名 日本ラカン協会ワークショップ
４．発表年 2020年

１．発表者名 石川学
２．発表標題 バタイユ思想の「倫理」的射程　戦争をめぐる思索から
３．学会等名 慶應義塾大学教養研究センター「研究の現場から」
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 石川学	４．発行年 2020年
２．出版社 慶應義塾大学出版会	５．総ページ数 112
３．書名 理性という狂気　Ｇ・バタイユから現代世界の倫理へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関